

## 特別講演 (2)

## 日本医史学会と日本歯科医史学会

谷津三雄

## 一、日本医史学会と日本歯科医史学会

日本歯科医史学会は、昭和四十一年十一月七日午後六時から湯島会館（現ガーデンパレス）で発起人会を開き、その席上で「歯学史集談会」を発足させることを決定した。そして第一回歯学史集談会が、昭和四十二年一月二十八日午後二時から日本大学歯学部会議室で行われた。この歯学史集談会は、昭和四十五年四月から「歯学史研究会」と改められ、さらに昭和四十八年四月から「日本歯科医史学会」と改称された。翌四十九年一月二十六日付で、日本歯科医学会の分科会として公認され、全国的な学会となった。

第一回の日本歯科医史学会総会（学術大会）は、昭和四十八年十月二十七日に、会長山田平太理事で、東京医科歯科大学で行われた。なお平成十四年度は第三十回をむかえ、第一〇三回の日本医史学会総会と合同開催で平成十四年九月二十八日、二十九日に日本歯科大学新潟歯学部で中原 泉学長を合同学会長として開催される。

なお、発足もない歯学史集談会が第七十回日本医史学会総会（日本医学会第一分科会）、第十一回歯学資料研究大会、第二回歯学史集談会総会の合同学会を主催し（会長 鈴木 勝、昭和四十四年五月二十三～二十五日）しかも当時なお学園紛争の後遺症が継続するなかで三日間にわたり開催された。当時、このように医学史、歯学史およびこれら黎明期に大いなる貢献をした蘭学についての史料研究大会を含めての合同学会は、過去の日本医史学会の歴史においても例がなく、このときが初めての試みで、しかも発足以来二年目の歯学史集談会が中心となって運営したことは、今でも日本医史学会史上に高く評価されている。

第八回日本歯科医史学会総会（学術大会、会長・鈴木 勝）は、第八十一回日本医史学会総会（理事長・小川鼎三）と第二十五回日本薬史学会総会（会長・木村雄四郎）の医歯薬史合同総会（学術大会、会長・鈴木 勝）で昭和五十五年十月十一日・十二日の両日に行われた。これを期に十年に一度ぐらひは合同で行いたいと小川理事長が提案。これにより私が平成四年六月五日・六日には、第二十回日本歯科医史学会総会（学術大会）と第九十三回日本医史学会総会（学術大会）の合同学会を行った。

## 二、小川鼎三先生と歯科

アメリカ人歯科医ウィリアム・クラーク・イーストレーキ、W.C. Eastlake が日本へ来たのは、万延元年（一八六〇）で、その時、開港まもない横浜には外国人の数も少なく、横浜では開業らしい開業はしなかったものようであるが、W・C・イーストレーキを日本における泰西歯科医学を伝えた最初の人とするには誰人も異論がなく、この年をもってわが国の近代・歯科医学発祥の年としており、今から一四〇年前のことである。

そこで、昭和三十五年（一九六〇）は丁度百年になり、何か記念すべき催事が行われていないかについてみると、今田見信先生からの寄贈物に入っている未整理のダンボールのなかに、日米修好歯科百年記念会に関する貴重な資料を発見することができた。その資料の中には、小川鼎三先生はまず「挨拶」を日本解剖学会用紙四枚に万年筆で書き、その内容を今田見信先生が目をとおし鉛筆で補足訂正したものをゲラ刷りにしたものがあつた。

また、小川先生は英文でもまとめられているが、その当時の日本歯科医師会長 President of Japan Dental Association は、Hiroshi KAWAMURA, D.D.S. びびび Time: Monday, November 14, 1960 at 3 p.m とあり、日本医史学会々々長 President of Japanese Society of Medical History, Teizo OGAWA, Prof., M.D. とあり、日本医史学会々々長としての小川先生の責任感と、まじめな性格がしのばれる。

## 三、学校歯科

日本歯科医史学会総会の第三十回を記念し、昭和初期の学校歯科を無声映画で紹介する。（日本大学）